

ルツ記 1 章 1-18 節「あなたの神は私の神」

小池 宏明 牧師

ルツが生きた時代は、士師（さばきつかさ）が治めていた。士師の時代を一言でまとめると、士師記 21 章 25 節「そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。」と言える。主なる神様への畏れが無く、秩序が無く、自分が中心になって、自分が良いと見えることを行っていた時代だ。しかし、主なる神様に信頼して生きるナオミやルツを、主は祝福して導いて下さるのだ。

*ナオミの信仰を受け継ぐルツ

ユダのベツレヘム出身、エリメレクは、妻のナオミと二人の息子（マフロンとキルヨン）を連れて、飢饉から逃れるために約束の地カナンを離れて、異国のモアブに移住した。当時イスラエルは「モアブ人は罪に汚れている」と見ていた。エリメレク家族は、モアブに移り住んでから次々と困難に直面した。（ルツ 1:3-5）食糧を求めてモアブに移り住んで約 10 年後、血の繋がらない三人の未亡人が残されてしまった。ナオミは、二人の嫁オルパとルツに、実家に帰るように命じるが、二人の嫁は、姑と「別れたくない」「一緒に行く」と、大泣きした。特に兄嫁のルツは、「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」（1:16）とまで告白して、何があっても姑のナオミと離れないと決意を示すのだ。嫁たちに影響を与えたナオミの信仰は、どんな幸いや災いがかきても、すべての出来事に、主なる神様の御業を認めて、主に全き信頼をおいて生きる姿だった。

（6, 8, 9, 13, 21 節）そんな信仰姿勢が嫁たちの信仰を強めたのだ。

*信仰を残して下さった高齢の信仰者たち

今日は、高齢者祝福礼拝として、記念している。高齢になり、いろいろなことが失われていく中で、何が残るのだろうか？やはり「信仰」が残る。主なる神様への全き信頼、どんな時にも、どんな幸不幸の時にも、決して主イエス・キリストから離れずに生きる、信仰者の生き様が人々をひきつけ、語り継がれて行く。決して孤独になることなく地上の生涯を全うして、まことに素晴らしい天の御国で、聖い民と共に永遠に救い主を喜び、ほめたたえながら生きることができる。これからも、死に至るまでも忠実な信仰者として、後輩たちの模範となって、礼拝出席において、熱心な祈りにおいて、賛美を捧げることに、献金を捧げることに、良き見本を示し続けて、確かに主なる神様は生きて働いておられることを証ししていけるよう共に励もう。